吉川幸次郎講演集

朝日選書 1

吉川幸次郎講演集

吉川幸次郎

朝日新聞社

吉川幸次郎(よしかわ・こうじろう)
1904年（明37）兵庫県生まれ　京
大中国文卒　京都大学名誉教授
「吉川幸次郎全集」（筑摩）

朝日選書　1

吉川幸次郎講演集　　定価580円
1974年2月20日　初版発行

著　者　吉川幸次郎
発行者　岡見　璋
発行所　東京・名古屋・大阪・北九州　朝日新聞社
印刷所　共同印刷株式会社

©K. Yosikawa　1974／装幀・多田　進

0398—259101—0042

序

朝日新聞社の要請によって、この冊を編んだ。

いずれもそのときどきの速記もしくは録音にもとづきつつ、あるものは相当に、あるものはわざと少なく、筆を加えた。「中国文学の性質」一篇は、発言の場所を尊重して、録音のままであり、筆を加えない。しかしいずれも、内容ばかりでなく、表現に対しても、私の文章としての責任を負う。

またいずれも専門家でない方方を予想しての発言であることが、かえって私の思考と学問の中心となるものを、期せずして、あるいは期して、語っている部分を含むように思われる。あちこちに重複があるのは、そのときどきの必要であったとして、おゆるしを乞う。時間をへだてての発言には、矛盾もある。「中国文学入門」九四頁で述べた中国自然詩の受動性は、概括に過ぎたようであり、「中国文明と日本」五〇頁、また「中国文学における希望と絶望」一六六頁が、その能動性を説くのによって、整合して頂きたい。中国音の表記として用いたローマ字も、その話をしたころ、大陸の標準であったものにより、前後わざと統一しない。

全十篇のうち、六篇は、筑摩書房版の全集既刊の巻巻からの再録であり、四篇は、その後のものである。また、全集の中には、同じ種類の講演体の文章で、ここには選ばなかったものがあり、うち「支那人の古典とその生活」は、岩波書店による単行本もある。

一九七三昭和四十八年十一月

吉川幸次郎

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

目次

序 1

中国文明と日本 5

神様のいない文明といる文明 63

中国文学の性質 81

中国文学入門 92

中国文学における希望と絶望 152

「論語」について 171

江戸儒学私見 194

訓詁の学 215

日本文学の特殊さ 227

文学と人生 236

中国文明と日本

上の一

老人ですから、すわってお話をさせていただきます。

きょうから十回にわたる「朝日ゼミナール」全体の題は「東洋文明と日本」ということになっておりますが、どうも朝日新聞社には少し悪いのですけれども、看板にいつわりがあるのじゃないかと思います。私がこれをお引き受けしましたときは、「中国文明と日本」というつもりで引き受けたのですが、新聞社のほうでは、いや、「東洋文明と日本」と言ったはずだ。お前はうん、うんと言ったと、そういうお話なのです。

で、総題目が「東洋文明と日本」ということになっておりますが、東洋と申しましてもたいへん広うございまして、そのなかには、文明の形態がたいへん違った地域が含まれている。インドと中国というのが、二つの大きな文明の地域でしょうが、この二つの文明がたいへん性質を異にしているということは、皆さん常識でご存じのことと思います。少し常識を補足するといたしますれば、インドのことを、僕はよく知らないのですが、よく知らない僕でも知っていることは、インドという国は、歴

史というものは、つまらないものだ、というのが、その文明の伝統であったようです。尊ぶべきものは、お経に書いてあるような、ああいった空想であって、空想こそ尊いものであって、事実というふうなものはつまらないものだということで、事実を記録することに、インド人自体は、たいへんおろそかであった。そのため、いまでもインド史を研究なさるかたは、インド人自体による記録で研究することがたいへんむずかしいということを聞いております。

それに対して中国は、その逆でして、人間の空想力というものへの信頼は元来、乏しかった。だから、てっとり早い話として、戯曲とか小説とかという、そうした虚構の文学、フィクションの文学、フィクティシャスな文学、その発生は、その文明のごく遅い時期を待ちました。遅いと申しましても、中国の文明の歴史はたいへん長うございまして、だいたい三千年ほど前まで追跡できる。歴史時代にはいるのが、紀元前千年ごろ、そうしていまは一九〇〇年代ですから、都合三千年になりますが、戯曲らしい戯曲が起こるのは、三千年のだいぶ末の方の十三世紀元(げん)の時代です。小説がハッキリした存在をとりますのは、さらに下がって明(みん)時代、そういうふうに、中国の文明の歴史としてはごく末のほうに、初めて戯曲や小説の文学が発生するのです。

これは、ヨーロッパの文学の歴史とはたいへん違った形態です。ヨーロッパの文学は、最初からフィクションの文学で始まっている。ホメーロスの叙事詩というもの、これは、地上の現実の事柄ではありません。神さまが出てきたり、英雄が出てきたりする。その次には悲劇とか、喜劇とかが、紀元前にある。

そうした形態とはたいへん違って、中国は、その文明の初期には、そうした虚構の文学をもちません。少なくとも、意識的に虚構された文学というものはありません。すべて日常の実在の経験を題材

とする。むろん人間の言語というものは、常に何ほどか現実よりもふくらまなければ言語にならないという性質を、好むと好まざるとにかかわらずもっていますから、「詩経」や「書経」に書いてあることも、事実そのままであるかどうかはわかりませんが、それらの書物を編集した人としては、また読む人としては、実際あった事実とそう意識されるもので、その文学は始まっている。これは、西洋の文学の歴史とたいへん違った形であることは、いままでもしばしば書いておりますから、私の「全集」の第一巻をご覧願います。

私、この講座では、いままで書いたことをせいぜい言わないつもりです。私のこれまで考えましたことは、だいたい私の本に書いております。一生懸命書いておりますので、実はきょうのお話をお聞きくださるのも結構ですけれども、お家へお帰りになって私の本を読んでくださったほうが、より多くありがたく思うのですが、いやおうなしにここへ引っぱり出されましたので、きょうも次回も、せいぜい、いままで本には書かなかったことを言おうとつとめております。そのつもりで聞いてやって下さい。

いま申しました西洋文学との比較、それは、いままでにもだいぶ書きました。だからそれらをご覧願いたいのですが、いまさっき言いかけていたことは、インドと中国の文明の形態はたいへん違う。インドはそういうふうに、歴史というものを軽蔑した。だから、インド人自体の記録によるインド史を再構成できない。ところが、中国はその反対です。いま申しましたように、虚構の文学の発生がたいへんおそいということでも示されるように、人間の空想力というものには元来、あまり敬意を払わなかった。敬意を払いだしたのは、文明の歴史が三分の二を過ぎてからです。それまでは、中国の文献のうちで韻文と散文とを分けますれば、「韻文」は詩でありますが、「散文」の重要なものは何かと

いえば、すべて歴史叙述です。「五経」の一つの「書経」といい、「春秋」というのは、すでに歴史です。その次にあらわれる大きな文献は、司馬遷の「史記」です。司馬遷の「史記」は紀元前一〇〇年、前漢のなかほど、日本はまだ弥生時代という時代らしいのですが、そのころに書かれた大きな世界史、それが「史記」なのです。

そうして「史記」の著者の司馬遷は、自分で宣言をしております。おれの本にはうそはない、と。司馬遷が「史記」を書きましたのは紀元前一〇〇年ですが、それまでに、千年以上、中国には文献の堆積があった。そのなかには、いろんな伝説が発生している。さっき申しましたように、人間はあまり空想力に敬意を払わなくても、言語は自然に空想によってふくらんでいく、それもまた人間の定めなのでして、司馬遷が材料としました文献の中にも、いろいろと古いことを説いて、奇妙な説が出て来る。時間的にそうであるばかりでなしに、空間的にもです。

司馬遷のころは前漢の帝国でありますが、その勢力はたいへん伸びまして、いまのソヴィエト共和国連邦の南のほうのフェルガーナ地帯、あそこに「大宛（だいえん）」という国があった。そのへんまでも、漢帝国の勢力は伸びていた。少なくとも、そこと接触をもっていた。それで司馬遷の書物の中にも、「大宛列伝」という一巻がございます。

その「大宛列伝」のおしまいに議論があります。司馬遷の本は一巻ずつ、記述のあとに議論がついておりますが、この巻のおしまいの議論で、こうした西方の遠い地域のことについては、いろいろおもしろい話も発生しているが、おれは、いっさいそういうものは採らなかった。この地上の事実として承認されにくい事がらを、私はいっさいここには載せていない、ということを宣言しております。

空間的にもそうですし、時間的にもそうです。人類の初めとしては、五帝という皇帝があったとし

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

て、そこから、司馬遷は記載を始めておりますが、この五帝のことについても、いろいろ奇妙な伝説が発生しているが、そうしたあやしげな説はいっさい載せないと、いっています。つまり地上の事実として容認されるかどうかという、そうした批評基準で、それまでに発生して、司馬遷が見得た限りの文献をスクリーニングし、弁別して、虚偽、地上の事実としてはあり得ないもの、そういうものは、司馬遷においては虚偽なのでありますが、そうした虚偽のものを全部除いたということを、たびたび言っております。

そうした確実な、あるいは確実を志す歴史書が、司馬遷の「史記」に始まりまして、以後二千年間ずっと司馬遷の伝統によって書き続けられ、実に今世紀に至っております。時代の順で申しますと、「史記」の次には、班固の「漢書」というもの、その次には范曄の「後漢書」、陳寿の「三国志」がある。それから、唐の太宗の書いた「御撰晋書」があり、「宋書」、「南斉書」、「梁書」、「陳書」、「魏書」、「北周書」、「北斉書」、「隋書」、「旧唐書」、「新唐書」、「旧五代史」、「新五代史」、「宋史」、「金史」、「元史」、「明史」と、そうした歴史叙述がずっと間断なくある。そうして、今世紀の初めに滅びました清朝については「清史稿」、これは原稿というので「清史稿」という名前になっておりますが、それが今世紀になって書かれている。そういうふうに歴史叙述は絶えたことがない。二千年間絶えたことがない。だから、何年何月の何時ごろにどういうことがあったかということ、それが確実なデータを伴って、重要な事件ならば知り得る。たとえば、唐の玄宗皇帝が安禄山軍に攻め落とされて、都の長安から逃げ出したのは、玄宗の年号でならば、天宝十五年の六月十三日の朝であります。太陽暦に直しますと、紀元七五五年の七月何日かです。その日の朝は、きょうのお天気のように雨がしとしと降っていた、微雨であった、というふうなことまでわかるわけです。そういう点では、西洋ともま

たたいへん違っているのです。

私、西洋のことはよく存じませんが、どうも西洋の中世の歴史は、中世人自身による、しっかりした記録というものは、ないのと違うのですか。さればこそ、ギボンが「ローマ帝国衰亡史」を、あとから非常な努力をして書かなければならなかった。つまり、中世という時代は、普通に暗黒時代と言われるように、キリスト教ばかりあり、ローマ法王ばかりが栄えて、どうもあまり哲学もなかったようですし、文学もこれというものはなかったようです。また、歴史叙述もその間が陥没しているというふうな状態があったが、中国にはそういう状態はございません。だから西洋での形のような中世はない。中国にも中世はありますが、それはまた別な形であって、みずからによる歴史叙述をもたないというふうな時代はなかった。そのへんも、ヨーロッパと中国とはたいへん違う。少し君たちその辺を考えてみないかと、このあいだ、ある若い進歩的な後輩に申しましたら、先生、いまこそおわかりになったでしょう、キリスト教というものが、いかに悪いことをしておったか、よくおわかりになったでしょうと、その進歩的な若い人は私に申しました。それはどうだか知りませんが、とにかくそういうふうにヨーロッパと違っている。しかしヨーロッパとの違いはおきましょう。初めに戻りまして、インドと中国の間には、以上のように大きな距離がある。

ところで、「東洋文明と日本」ということになりますと、そうしたインドの問題も考えなければならない。また、われわれの大きな隣国として、やはり独自の文明をもっているのは朝鮮であります。さらにまた、ベトナムがあり、タイがあり、ビルマがあり、インドネシアがあるということになるのですが、そうしたつもりで私はお引き受けしたのではないのです。ほかの講師のお話もだいたい中国と日本の関係が多いようでございます。岸辺さん（岸辺成雄氏）の音楽のお話、それから西谷さん（西

谷啓治氏）梅原さん（梅原猛氏）の仏教、これはインド起源のものでございますから、広義の東洋ということになりましょうが、少なくとも私のお話は「中国文明と日本」、東洋文明の中の一部分である中国文明と日本との関係ということについて、さっき申しましたように、これまで私が書かなかったこと、老人になってだんだん頭の回転はおそくなるのですが、そのおそい回転によって近ごろ考えましたことを、せいぜい申し述べたいと思います。ですから、考えの熟していないところ、あるいはまた、老人は気がせきます。なにぶん老いさきも短かいので、何とかいまのうちに考えておこうと非常にあせっておりますので、考えすぎもあるかと思いますが、それはあとでいろいろご注意をいただくことにしたいと思います。以上前置きでございます。

上の二

日本と中国文明との関係ということを考えますと、日本はたいへん中国文明を摂取するのに熱心であった、ということが常識としてあります。最初、中国の書物が日本へ入ってまいりましたのは、「古事記」によれば、応神天皇のときに「論語」と「千字文」とが、朝鮮を経由して日本へ入ってきた、それが初めであると、いうことになります。そうした記載は、このごろの歴史家によって信用されないのでしょうが、とにかく五、六世紀のことではあるでしょう。それ以後千何百年間か、日本は常に中国文明を輸入することにたいへん熱心であったということは、われわれの常識でもあり、また中国の人と接触をいたしますときに、外交辞令としてもしばしば言われるようです。日本人によっても言われ、中国人によっても言われる。いわゆる、同文同種、まず第一に、手近なところ、文字さえ

も、中国の字を使っているわけです。

この常識は大いに事実です。われわれは、たいへん中国文明を摂取するのに熱心であった。ことに、最も熱心であり、最も成功いたしましたのは、明治維新のすぐ前の時代である江戸時代、一六〇〇年の関ケ原の役に始まりまして、一八六八年に至るまでの江戸時代は、ことに熱心な時代であった。これは大きな事実です。またそれまでの時代では、奈良朝を中心とする早い時代、これは後に、森先生（森鹿三氏）の「律令と日本」でお話がありましょうが、そのころの日本の法制はだいたい、中国の法制を基礎にしている、いやまる写しにしたというふうなことがございます。また、奈良朝の服装、少なくとも官吏の服装は、唐のものをそのままねている。それから日常の生活においても、貴族たちは中国のとおりを学ぼうといたしまして、いろんなものを輸入した。それがいまの正倉院のあの宝物として残っている。そういうふうな大きい事実がございます。

そうしてまた、日本における中国熱は、なかなか高潮もいたしました。ことに江戸時代の儒者の仕事、儒者というのは中国の儒学、それを日本で祖述し、実践する人びとなのでありますが、その儒者の重要な仕事は、少なくとも言語生活においては中国人のとおりであろうということが、義務でありました。儒者は、こんにちの大学の外国語の先生のように、外国語が読めるだけではいけない。幕府の学校の昌平黌（しょうへいこう）の先生にいたしましても、あちこちの藩校の先生にしましても、今日の大学の英語やドイツ語の先生のように、英語が読める、ドイツ語が読めるというだけではいけなかった。訓読の漢文という形ですけれども、中国語が読めるだけではいけない。自分自身中国語が書けなければいけない。漢詩すなわち中国語の詩をつくり、漢文すなわち中国語の散文が書けなければいけない。しかもせいぜい中国人と同じように書く、中国人と見まがうように書く。そうしていちばんいけないとさ

れたのは、その漢詩漢文に、日本的なにおいがはいることで、それを「わしゅう」と申します。「和習」、「和臭」、二とおりに書くようです。あとのほうは日本的なくささということですが、普通には、前のほうを書くようです。どちらにしても、日本的なにおい、それがはいると、それはいちばんいけない。せいぜい純粋な、中国的な雰囲気をもってなければいけない、そうした責任をもっていたわけであります。

こんにち、日本の大学の先生は、原則として英文学の大家でも、英語をじょうずに書くこと、あるいは英語の詩をつくることが、義務になっておらないと思いますが、江戸時代の儒者は、そうでなかったわけであります。しかも、和習があるのは何よりもいけないということは、価値の基準が完全に中国におかれていた。中国人の言語生活におかれていた。単に言語生活ばかりでなしに、考え方においても、せいぜい中国的な考え方をするというのが、江戸時代の儒者と申しますか、漢学者の任務であったわけであります。

私はその生き残りでございまして、五十歳ごろまでは、せいぜい中国人と同じように中国語がしゃべれ、中国語が書け、中国語が読め、そしてまた中国人のように考えることはできないかと思って、それを目標にして勉強してきました。五十以後は、それはとてもむずかしいということをさとって廃業いたしました。そのような生き残りも、まだいる。江戸時代には、それがひろく漢学者の任務であったわけです。

そうしてまたそれは、単に学問の面だけでなしに、芸術においてもそれはあったのであります。まず儒者の仕事の中で詩をつくるということ、これは才能があってもなくても、詩をつくらなければ儒者でないのです。詩も芸術の一種といたしますれば、詩をつくるのにも、言語表現が中国の文法な

り、用法にそむかないのは言うまでもなく、発想もせいぜい中国的でなければならない。もしそうでなければ、和習があるということになっていたのは、やはりクライテリオン、批評基準が、中国にあったということであります。

そのことは、南画もそうです。南画というのは日本人が目指す中国画です。そのことも北野さん（北野正男氏）のお話がいずれあると思います。それからまた書も、お手本は王羲之から始まりまして、欧陽詢、虞世南、近くは文徴明、趙子昂、あるいは董其昌というふうな中国人の字のとおりに書くのがよいとされていた。何の本で読んだか忘れましたが、江戸の末期の書画家の仲間に、一人たいへんな中国ハイカラがいて、書画会なんかへ出ていくと、どの人の書を見ても、絵を見ても、これは和習じゃ、和習があると言って、けなしてまわるので、ある男が憤慨いたしまして、あなたは一体どこのお方ですか、中国のどこの省のお方ですかと聞いたので、その男、ギャフンとまいったという、そうした笑い話をどこかで読んだ記憶がございます。そうした状態が非常に有力に日本にあったということは、たいへん大きな事実でございます。

上の三

ところで、そうした日本人にとって、中国は恋人みたいなものでした。ただいまも、中国は日本人の恋人に多少なりつつありますが、いまの騒ぎどころではないのです。たとえば、そうした中国に価値の基準をおくべしということを、哲学として主張したのは、江戸の中ごろに出ました荻生徂徠です。十七世紀末から十八世紀はじめまでの、綱吉から吉宗のころにかけての、偉い学者であります。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo